
Death in the Rain

s a g i t t a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Death in the Rain

【コード】

N3025A

【作者名】

Sagittta

【あらすじ】

冷たい雨が、激しく降り続いていた。私は、濡れそぼった街の中で、傘も差さずに立ち尽くしていた。死を思う私が、雨の中出会った不思議な男。

Death in the Rain

冷たい雨が、激しく降り続いていた。

私は、濡れそぼった街の中で、傘も差さずに立ち尽くしていた。

駅から出てきた人々が、激しい雨を疎ましそうにしながら、天から降ってくる冷たい水の粒を避けようとするかのように、足早に街を歩いていった。

雨に濡れることを厭うのは、守りたいものがあるから。大切なものを濡らしたくない。荷物や服や、自分の身体を。

だから私は、濡れることを厭わない。私には大切なものなんて、何一つないから。そう、自分の身体さえも、私にとっては守るべきものではなかった。

雨は、降り続いていた。

降ってくる雨と同じくらい冷たい都会の人々の感情は、濡れ続ける私の姿なんかで動かされることはない。いつもと変わらぬ街の中で、頭からつま先までじつとりと濡れた私の姿だけが浮き上がっていて、自分が幽霊になったような気分だった。

「お嬢さん、どうしたんですか？」

私の横で、突然若い男の人の声が出た。唐突な声は、まるで私の胸の奥に直接響くようだった。激しい雨音にかき消されることもなく、私の凍えた身体にゆっくりと沁みていく。

「今日の雨は冷たいですよ。こんなに濡れてしまったら風邪を引いてしまいます」

再び聞こえた男性の声に、私はゆっくりと首をめぐらせた。

立っていたのは、極めて風変わりな男だった。黒い燕尾服に、黒の蝶ネクタイ。ご丁寧にシルクハットをかぶり、木製のステッキまで持っている。雪のような白い肌、精緻なガラス細工のように整った顔立ちは、人の良さそうな笑みを浮かべて私を見つめている。

「大切なものなんて何も無い、自分の身体でさえも　そう思って

いらつしやるのですね？」

燕尾服の男は、そう言いながらステッキと反対の手に持っていた黒いこうもり傘を、私の方に差し掛けた。

私は、はっとして男の瞳を見つめた。彼の黒い目は、まるで何も映していないかのように静かな闇を湛えている。

「そのとおりだ、という顔をしていますね。……それで、あなたはどうしたいのですか？」

「……わ、私は」

私は声を出そうとするが、かすれてしまつてうまく喋れない。

「このまま死んでしまいたい、自分の存在を消してしまいたい、違いますか？」

男の言葉に、私は息を飲んだ。彼の言うとおりだった。私は死に場所を見つげるために、雨の街の中に飛び出してきたのだ。

「なぜですか？」

男の言葉は、唐突だった。私は一瞬、彼が何を言っているのか理解できず、問い返す瞳で彼を見つめた。

「なぜ、死にたいのです？」

彼は、できの悪い生徒に教える教師のように、ことさらにゆっくりと私に問いかけた。

なぜ、死にたいのか。

改めて聞かれると、言葉にするのは難しい。

あえて言うなら、生きる意味を見出せずにいるから、ということになるだろうか。

この世界の中で、私が私として生きている意味はひとつもない。

もし今この場で、私がこの世から消え去っても、世界は表情ひとつ変えることなく、いつもどおりに回り続けるだろう。

それが、なんだかとても虚しかったのだ。

「世界の中で、自分の生きる意味を見出せないから、だから死にたいと？」

男が小馬鹿にしたような口調で言う。その口調は私の心をひどく

苛立たせた。いや、そんなことよりなぜこの男は私が心に思ったことを言い当てることができたんだ？ 私は、警戒心もあらわに燕尾服の男を睨みつけた。

「どんな不幸を背負っているのかと思えば、とんでもないお子様ですわねえ」

私の視線など気付かぬげに、燕尾服の男が唇の端を歪めて見せた。言葉は相変わらず丁寧だが、その内容は毒に満ちている。私はさらに表情を険しくして、軽薄そうな笑みを浮かべる男の顔を睨んだ。

「ええ、あなたの言うとおりですとも。あなたごときが、この世で生きる意味など何もございませんよ。そりゃあそうでしょうよ、あなたのような小娘が、生きる意味などという大層なもの、持っているはずがないじゃありませんか」

あんまりな男の言葉に、私はかっとなって右手を振り上げた。ぱしっという濁いた音。

私が振り上げた手は、男に掴まれていた。私の手を掴むときに手を離れたころもり傘が、ゆっくりと地面に落ちる。激しい雨が、男の燕尾服を、その美しい顔を、濡らしていく。

「おやおや、怒ったのですか？ なぜです？ 自分が世界に必要な存在だと、認めるのが嫌だからですか？」

私の手首を掴んだまま、男がその真つ暗な瞳で私を見つめる。

「あなたはその事実には抗おうとしている。ならばなぜ命を絶とうとするのです？」

打って変わったように優しい声で、男は私の耳元にささやいた。

「あなたもわかっていているのでしょうか？ 世界にとって、自分の価値がなかるうとも、それでも人は生きていく。世界があるから人がいるではありません。人がいるから世界があるのです」

男の言葉は、極上の美酒のように甘く、私の心を捕らえて離さなかった。

「生きる意味など、自分で見つけるものですよ」
その言葉が、とどめだった。

私は、気が抜けたように、アスファルトの道路に膝をついた。途端に、熱い涙があふれ出してきた。涙は冷たい雨に流されて、すぐに消えていったが、その温もりは頬に残って消えなかった。

「さて。もう、死にたいなんて思っていないようですね。私はこれで失礼します」

男は、道路に転がっていたこうもり傘を拾い上げると、くるりと私に背を向けた。

「あなたは……」

私は、かすれる声を絞り出した。男が、首だけを軽くこちらに向けてる。

「死神、ですよ」

そう言っつて、皮肉げに彼は笑った。そのまま、ひよひよいと飛ぶような足取りで、人ごみの中に消えていく。

気がつけば、雨はいつの間にか上がっていた。再び顔を出し始めた太陽の光が、凍える街を暖めていく。

私は静かに立ち上がり、歩き出した。彼の去ったのとは逆の方向へ。

生きる意味を、見つけるために。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3025a/>

Death in the Rain

2008年11月7日07時34分発行